

最近話題となっている病害虫

奈良県農業研究開発センター 環境科 総括研究員 井村 岳男

タバコノミハムシ

学名: *Epitrix hirtipennis* (Melsheimer)

英名: tobacco flea beetle

■はじめに

タバコノミハムシ *Epitrix hirtipennis* (Melsheimer) は、北米原産とされる侵入害虫であり (図 1)、我が国では 2011 年に関東の 1 都 6 県で初確認された。その後、九州から北陸に至る各地から、農作物での本種の発生が相次いで報告されている。

本種は、タバコ、ナス、トマト、ホオズキ、ジャガイモ等のナス科作物を加害することが知られており、北米ではタバコやナスの重要害虫とされている。我が国では、主に家庭菜園や減農薬栽培ほ場で発生しており、慣行防除ほ場ではほとんど問題視されていない。しかし近年、露地ナス栽培において土着天敵温存を主眼とした減農薬の取り組みが増加していることから、本種による被害が顕在化することが懸念されている。



図 1 タバコノミハムシの成虫 (体長 1.5~2.5mm)

■生態と被害

奈良県の露地ナスでは、5 月から 10 月に、おおむね 1ヶ月間隔で 5 回の成虫発生ピークが観察された。本種は原産地では成虫越冬するとされることから、県内では年 4 世代を経過していると推定される。

主な被害は成虫による葉の食害であり (図 2 左)、ナスでは新葉に加害が集中する傾向がある。また、多発すると新葉に多数の小孔が発生し、花弁も激しく食害される (図 2 右) が、果実を食害しないので、直接減収に結びつくような被害は確認されていない。幼虫は土中で根を摂食するとされているが、根部食害による株の萎凋や、ジャガイモ塊茎への食害などは今のところ確認されていない。

■防除対策

本種は、もっぱら家庭菜園や減農薬栽培ほ場で被害が見られることから、殺虫剤に弱いとされている。ナスで農薬登録のある殺虫剤 31 種の、常用濃度における成虫に対する殺虫効果を室内試験で確認したところ、ピレスロイド系、ネオニコチノイド系、インドキサカルブ、メタフルミゾン、クロルフェナピル、シアントラニリブロール、フルキサメタミドなど、コウチュウ目に殺虫活性が期待できる剤は死亡率が高かった。このことから、殺虫剤散布を中心とした慣行防除がなされているほ場では、本種が問題化する可能性は低い。ただし、これらの薬剤は本種に対する農薬登録がないので、本種の防除を目的として使用することはできない。今後、減農薬の取り組みが進む中で、本種の被害が顕在化してきた場合には、農薬登録拡大の取り組みが必要になると考えられる。

このほか、本種成虫のナス株上での垂直分布は、下位葉と上位葉に多く、中位葉で少ない独特の分布を示し、特に最下位葉に多数の成虫が群生している様子が観察された。ナス栽培では、定期的な下葉のかき取りが慣行の栽培管理として行われるので、成虫が付着した下位葉を肥料袋などに入れてほ場外に持ち出すことで、耕種的に防除できる可能性がある。



図 2 成虫に食害されたナス (左: 株上位葉、右: 花)

参考文献:

原田・滝沢 (2012) 日本における侵入害虫タバコノミハムシの発生. 応動昆 56 117-120.

井村 (2020) タバコノミハムシに対する各種殺虫剤の殺虫効果と本種成虫の生態に関する若干の知見 関西病虫研報 62 21-25.